弓削通信 フェニックス

2012.3.15 №22（通巻149）Since 1991.6

発行者　平山和昭　☎&Fax 0897-77-3072
〒794-2509 愛媛県越智郡上島町弓削土生318-2
メール　yugeru3@ray.ocn.ne.jp
ツイッター　http://twitter.com/yugeru
ブログ　http://blogs.yahoo.co.jp/yugeru_fish

発行支援　NPO「頼れるふるさとネット」印刷 相方印刷（因島）

島国日本の縮図と、島で暮らす我ら

●東日本大震災の影響

昨年3月11日の東日本の大震災はその規模と中味で世界に例を見ない被災となった。遠く離れたこの瀬戸内の地でも、直接的に縁故、知人が罹災せずとも人々は大きな影響を受けているはずである。

自然の猛威の前には科学の粋とも言える原子力制御システムもあえなく降参したし、普段何気なく接している明媚な風光も、素顔は制御の効かぬ悪魔。あるいは、人の力の頼りなさと強靱さ、などなど様々な局面で考え込まざるを得なかった。

毎年春3月は社会のシステムの更新時だ。年度末と言う言葉で表象されるそれは、一年の反省の時でもある。

我が町でも、今年は合併3期目の首長と議会議員の改選の年でなにかと慌ただしい。

未来にツケを残さない生き方の選択

●合併特例債の期限延長だが

昨年夏、合併後の地域振興や旧地域間の格差是正等の名目で起債できる合併特例債、つまり合併年度及びこれに続く一〇カ年度に限り、その財源として借り入れることができる地方債の期限が5年延長された。

東日本大震災で大きな被害を被った自治体の負担を減らす目的でもあった。それは事業費の95％に充当でき、元利償還の7割は交付税措置となる。つまり実質負債は3割ということで、これを有利な起債と称しいろいろ箱モノ建設に手を出す自治体も少なからずある。わが町も例に漏れない。

「上島町は景気がええのう」と言われるほどだが、実質3割で済むとは言え借金を積み重ねることに変わりはない。

ハコモノは安くはない。作った後の維持費も管理責任も発生する。ただでさえ乏しい自主財源を圧迫し、真に町民の望むサービスに手が回らなくなる。

【写真説明】
尾道直行便には十台余の自転車（原付も可）が積み込める。自転車百五十円、原付は二百五十円の均一料金。現地での機動力が増す。

民意の実現に向けて
議会はなぜ汗を流さぬのか

●町の安心安全とは

町民の望むサービスにはいろいろある。すべてを叶えることは出来るはずもないが、上島町における町民の最も望んでいることは何であろう。医療施設の充実ではなかろうか。

愛媛県の全医療施設数は人口687人に1の割合で散在している。およそ千人に1施設と考えれば弓削には3，生名には2，岩城にも2の施設があってもおかしくはない。とはいえこれは来てくれる医師が居なければ叶わぬゆえ、現状に失望しつつ町民の多くは、四国や本土に連なる医療施設に通う。つまり、本州、四国に通う船便の確保こそが、町民にとっては医療施設に代わる望みということになりはしないのか。

尾道直行便の経営難の現状については先月号で報告させていただいた。おかげさまで町民の皆さんは、あえて尾道便を利用するほど事態を深く受け止めて頂けている。

●議会はだれの味方か

ところで3月議会では、今治因島航路（芸予汽船株式会社）から、経営難にもとづく公金投入による高額の赤字補填要請が上島町に求められている件が報告されている。

もし芸予汽船に公金で支援可能なら、尾道直行便航路業者が昨年9月、弓削寄港を復活させたとき、その後の対応について「尾道弓削直行便存続連絡協議会」が、上村町長に面会を求め、同航路の存続に向け、

『復活成った弓削尾道直行便航路の、さらなる存続に向け、上島町理事者におかれましては、町民の本土への足、本土から上島町への足の確保及び我が町のこれからの活性化の大きなアイテムとしての弓削尾道直行便航路の重要性を再認識され、今まさに努力を重ねている運航業者への支援の施策を勘案して頂きたく、ここにお願いするものであります』

（請願書文面）

と然るべき支援策をお願いに行ったとき「県内に自治体が民間企業に公金の投入をもって支援した例はない」と断られたことをどう整合するのであろう。

航路が大事と思うなら、相手がどうのこうのと言うより、まず行政側から協議へ歩み寄りを踏み出せばよいだけだ。議会もしっかりしてほしい。

誤解のないように述べるが、我々はひとえに町民の安心安全の確保のために尾道航路は必要であり、それが観光開発（町への集客）にとっても大事な道具であると思うから、過去十一年の実績のある同航路の存続を願い応援しているのだ。それ以上でも以下でもない。

●またもや出てきた箱物

町民の安心安全を置き去りにしていながら、またぞろ出てきた石山開発素案、あるいはJA跡地への新たな「弓削総合庁舎別館（仮称）」建設計画案。このご都合主義をどう受け止めたらよいのだろう。

（平山和昭）

おしらせ

3月9日、尾道直行便航路存続に向けての陳情書が上島町長に提出されました。提出者・濱村隆、浜田光　署名者1，890名（代表者発表）

きどぐち 二十二

青木喜代子

あの日、私は申告を済ませ近所の店にいた。ラジオから聞こえる「念のため、強いゆれにご注意下さい」と強い口調のアナウンスが気にはなっていた。

私達に出来る事を、友人とタスキ・プロジェクトの活動に手を挙げ、五十個余りの荷物を東北へ送った。思いがけずその中のひとつを受け取った人が、友人にお礼状をくれた。その事で交流が始まった。

南相馬の仮設に住むその人は、大好きな花はもちろん、家ごと津波に持っていかれた。畑は塩害で耕作不能。

秋が深まり、友人が「何か出来る事は？」と聞くと「冬物が何もない・・」

そこで親類、知人に声をかけ、毛布、衣類を集めて送った。友人とは荷造りの都度言い合う。

「決して無いよりましでしょ、と考えないで、自分がもらってうれしい物を届けようね」と。

荷物が届くと、本当にていねいなお礼状をくれる。先日、電話をかけると「ほんと、誰がこんな事してくれっか。ありがたいよ」と。寒い仮設でケータイを握って話している姿を想うと涙が出そうになった。

そして今日手紙が届いた。

〈今日より主人は親族の一周忌法要。三月十日頃まで続きます。一人になると強がりの私も、やはり涙が出ます。泣いちゃだめ。思い出してはと、頭と心がばらばらになります。三月十一日すぎたら、又、二歩三歩と前進して、明るく希望を持ってと思います。〉（原文のまま）

これを読んで、泣いてしまった。

夫にカーナビで南相馬を検索してもらうと一〇四四キロ。会いに行くには遠い。でも、もう少しの間、よりそわせてほしい。